上州榛名詣

享味
新撰

上州榛名詣

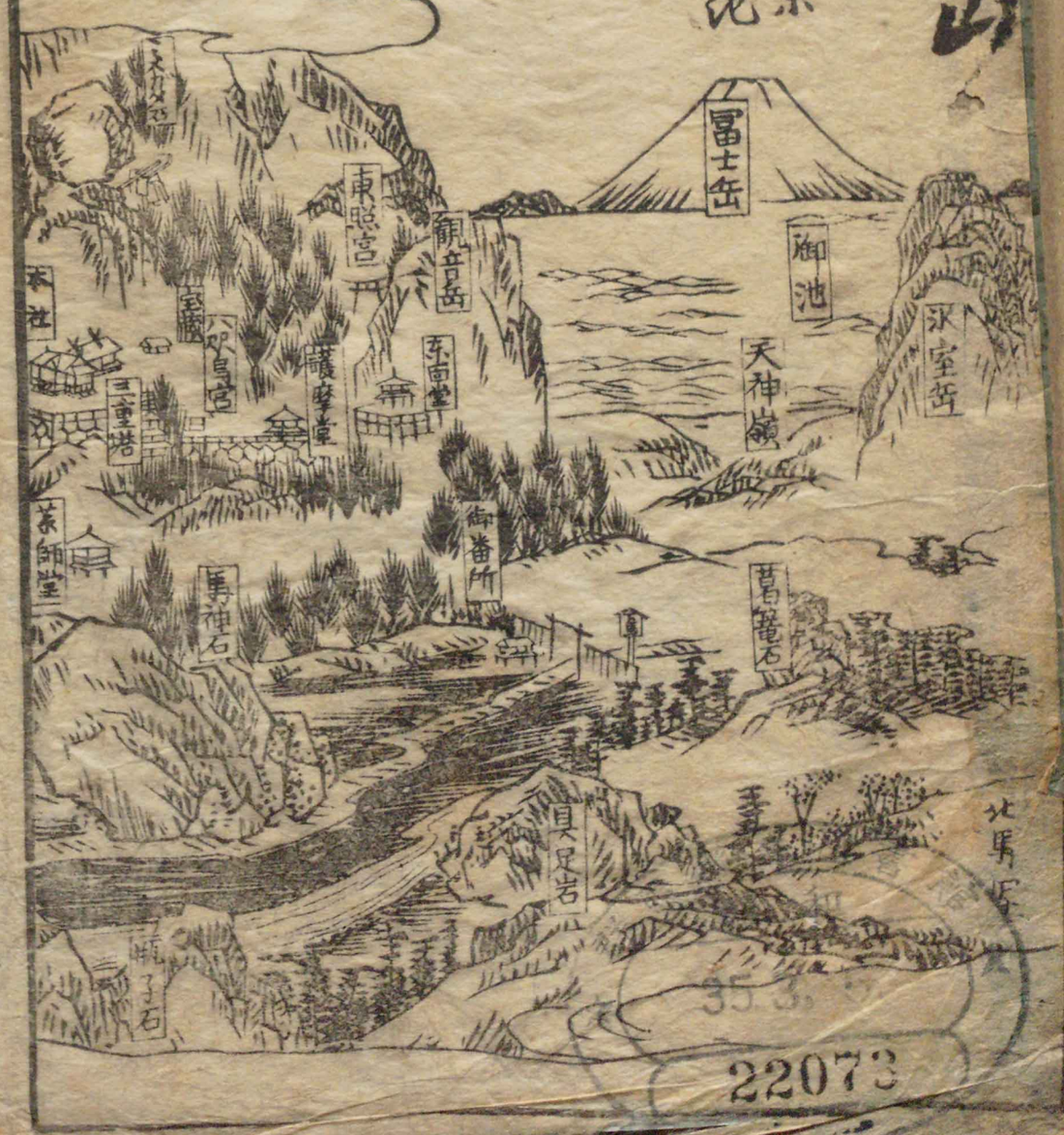
星運堂
版

K29
U

K298
M53

榛名山畧畫山

二王門より
本宮まで四丁余
本宮より本沈
まて十八丁
本神殿いと
思まて二里
境内三里
四方のうち
名嶽四十八
名石四十八
故る由来
甚まヶ二王門
より茶津迄
大戸堺



杖神殿二里
表迄
室田男
牛玉橋まで
五十丁
松井田
明神男まで
三里十丁
言寄迄
笠嶺
三里いつまも
名石

22073

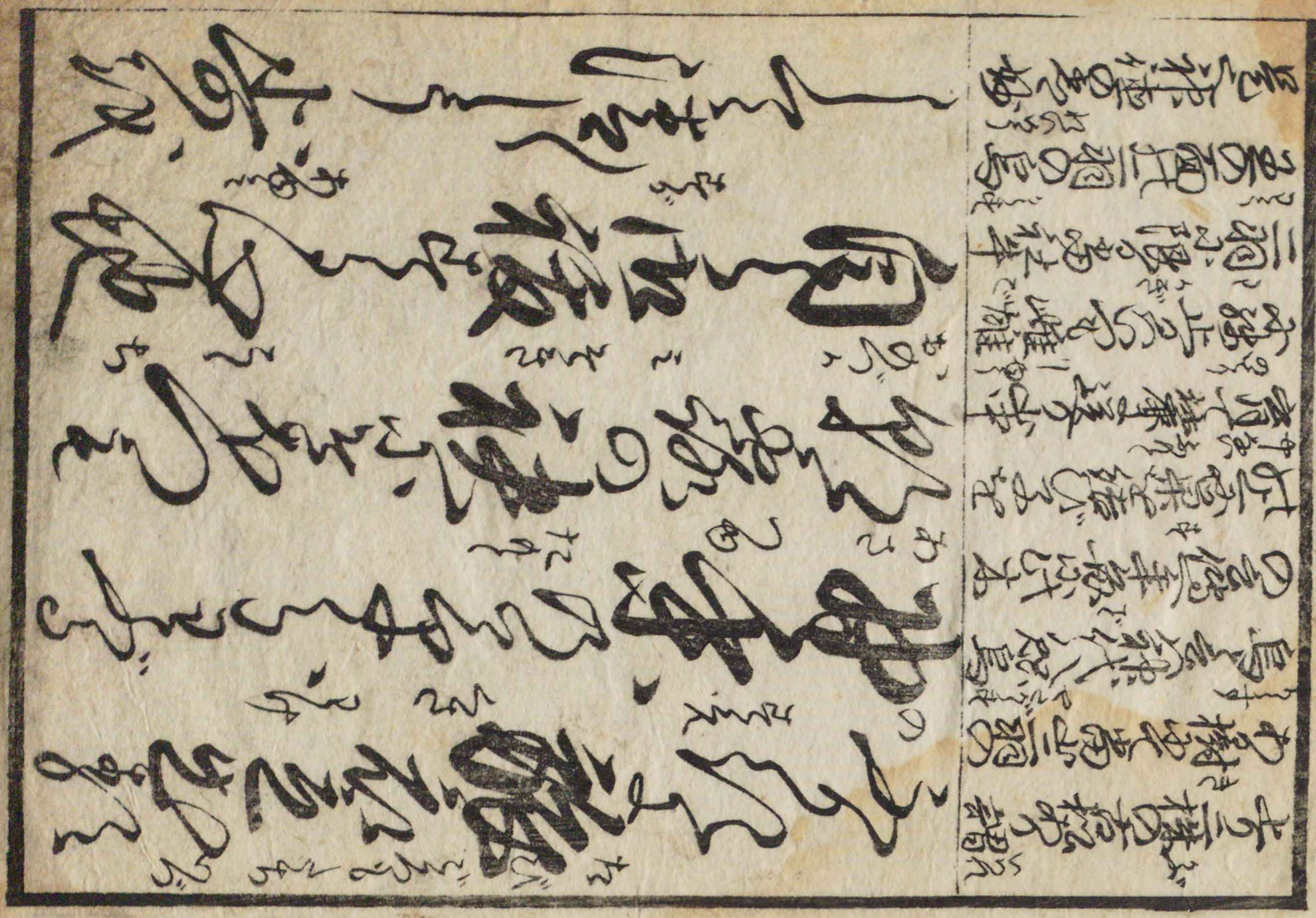
多くしてとも紙面
ふねくることわらぶ
暑く

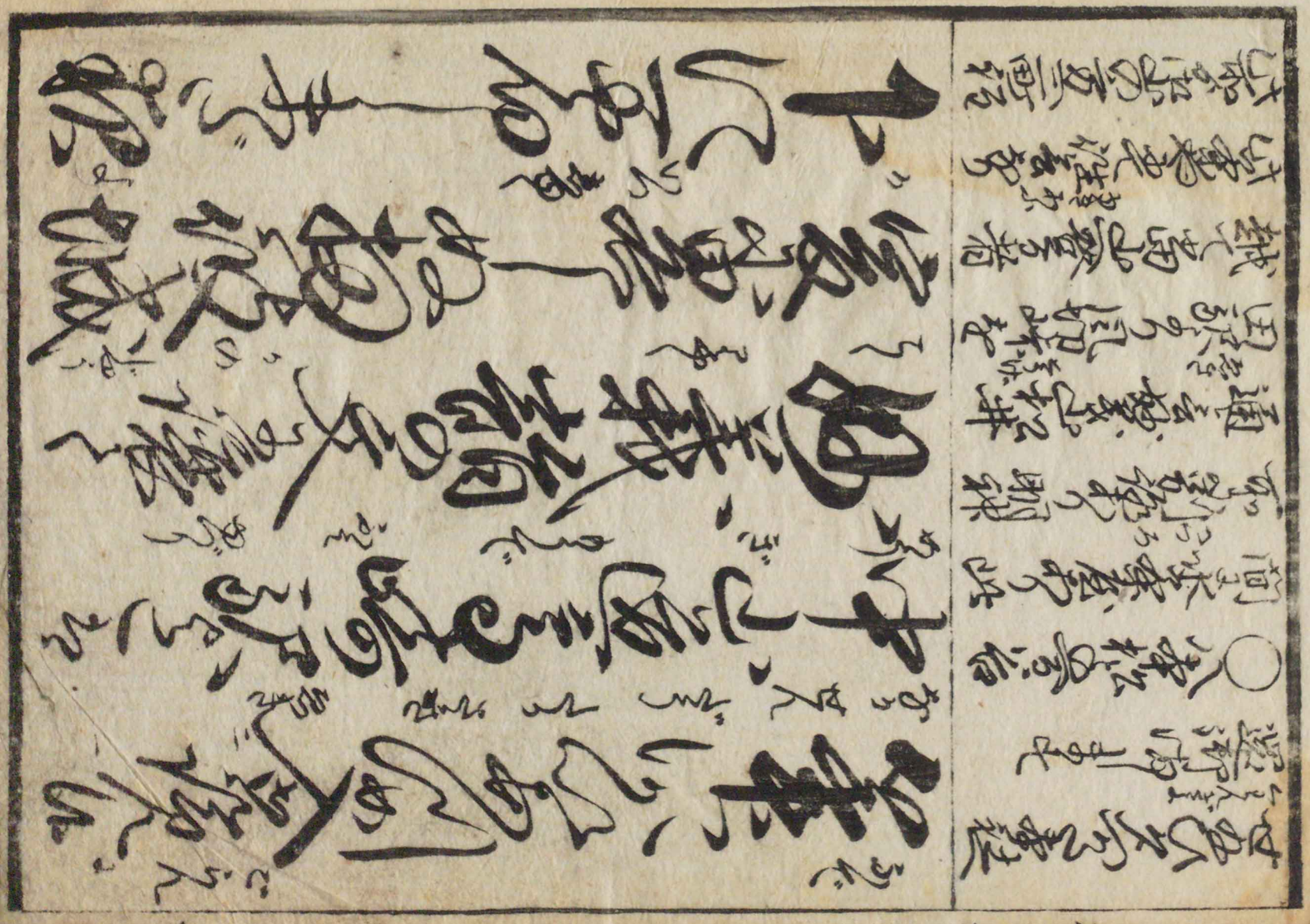
たんてつの浅間山やけて砂降
田畑をうづむる
さを流よ及こしも
浦神社のく
砂かくす
神威奇妙
誰か仰ぎ
なくさん

○榛名山図の
神つを入て出旅所
の遊場わり又右の
方に渓を隔てる
向の木立を遊行
峯と云陽手九月
九日祭礼の神輿
遊行峯ふ法華
わり出の猫素供
奉て出と流

榛名神
烏滸歌人
清水玄叙述

江戸聊の
榛名
泰陽
耳目
多分
不拝





禽鳥まで宵祭

事なり

○高山峨々たる
雲霧峰寺中に
鞍掛岩に白尺の虹
霓の雲生じ蜺
龍の蟠るが如く自
然の形図と驚し
柳子岩怪無比乳
の形図〜雷天の嶽

逝く人や梅の花村
天龍寺の宗吉
日吉山の社人
大師の事あり新光
厳山寺道風

風天の岳に雲霄を
突き峰屏風の
如く鎧甲岩大黒岩
瓶子岩猿の嶽烏
神石牛神石鶴亀
石神楽獅子の上に
出福石七奇あり
上宮数百仞の岩壁
数頃小岩窟三ツ
あり三尊の弥陀

生蔵の頭の鎖今宮義
納屋や海村も
打ち寄せまつ月の
吉ヶ浜波村
地蔵原村

次段の峰に岩屋
不動尊が嶽烏帽
子の岳冠の岳を
外に渡七山一
箕山石垣山岩垣
山雁餌岳氷室嶽
六八天狗の宮あり
○石階凡余級を
登りて第一の鳥居
の傍に犬神石とて

河浪に岩白川乃
流を渉る東山村楼名
大戸の郷神鳥濱村
駒形の社を左に
見なし坂ゝく

四川して水を流す
因疾病痛に霊験
ありと云又石階凡
余級を登れバ十
二葉の知恵あり
月の数を知る桐之
よって歴序相と
号す又石階凡十
余級を上りて神
前なり

神戸村外楼名の宮
拝遥相鳥坂
上里宮田村長年
禅寺永禄の頃
南國長尊法流当

○歌枕そこのぞ
きうの者の傳は洞
門あり深く流水の
滴りの者の岩と
云沒の小角經歷
しゆひ一和名前
澤和名
○多水湯の傳の
岩に出湯一名
清水石神あり

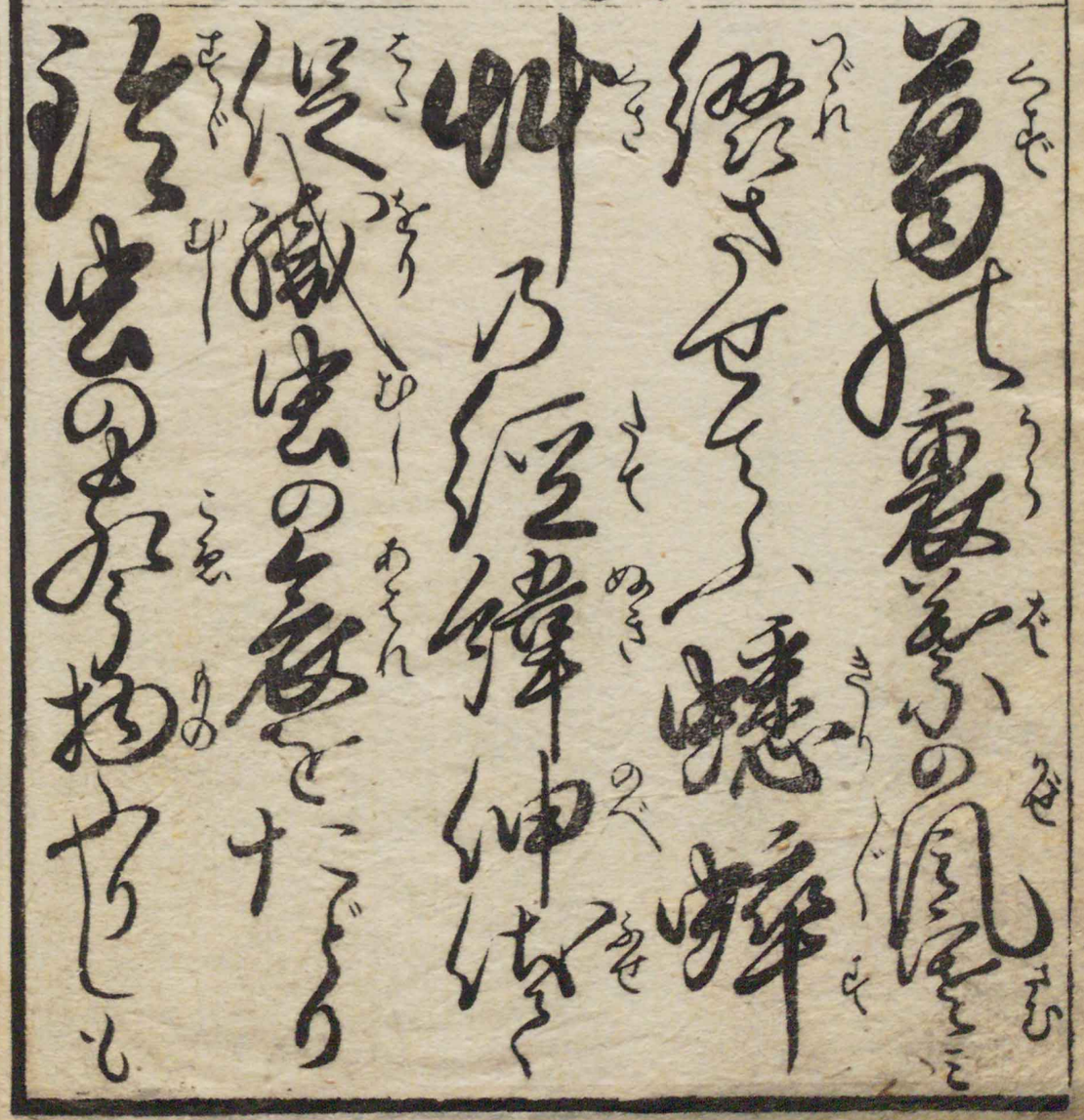
関
大森
本戸
小ゐる
御
瀬戸
乃
戸津の温

萬年泉の三ヶ所
実の崔君讀法長
崎の平君銘といふ
泉あり天泉中に旱
魃の年歳星の中
ふりしの石神に雨
乞祈此水を汲て
ゆり事中れば
元ばれば必徴驗
あり云ふ

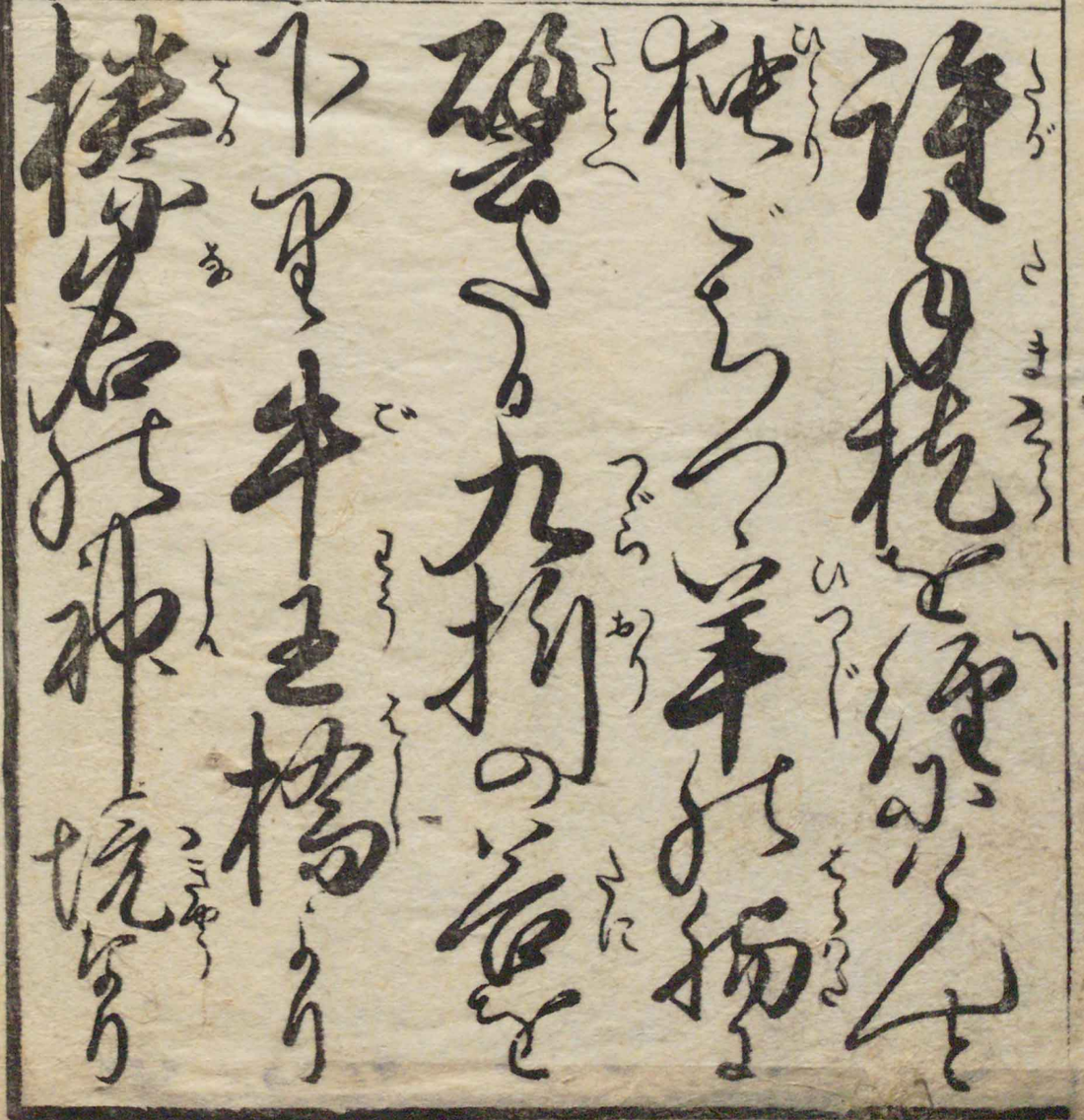
信州
亟ひ原
わ
神人塚
大
野原
平
泉
澤
和
澤
松
の

○薬師堂の傍
瑠璃光佛日月二光
十二神將八逆十善
少七堂十八伽藍
とゝ中堂の本尊
とうあおぐく役の行
者畫數百丈の岩
かたはらの此岩の
小護摩洞を遍
照金剛と行字訳

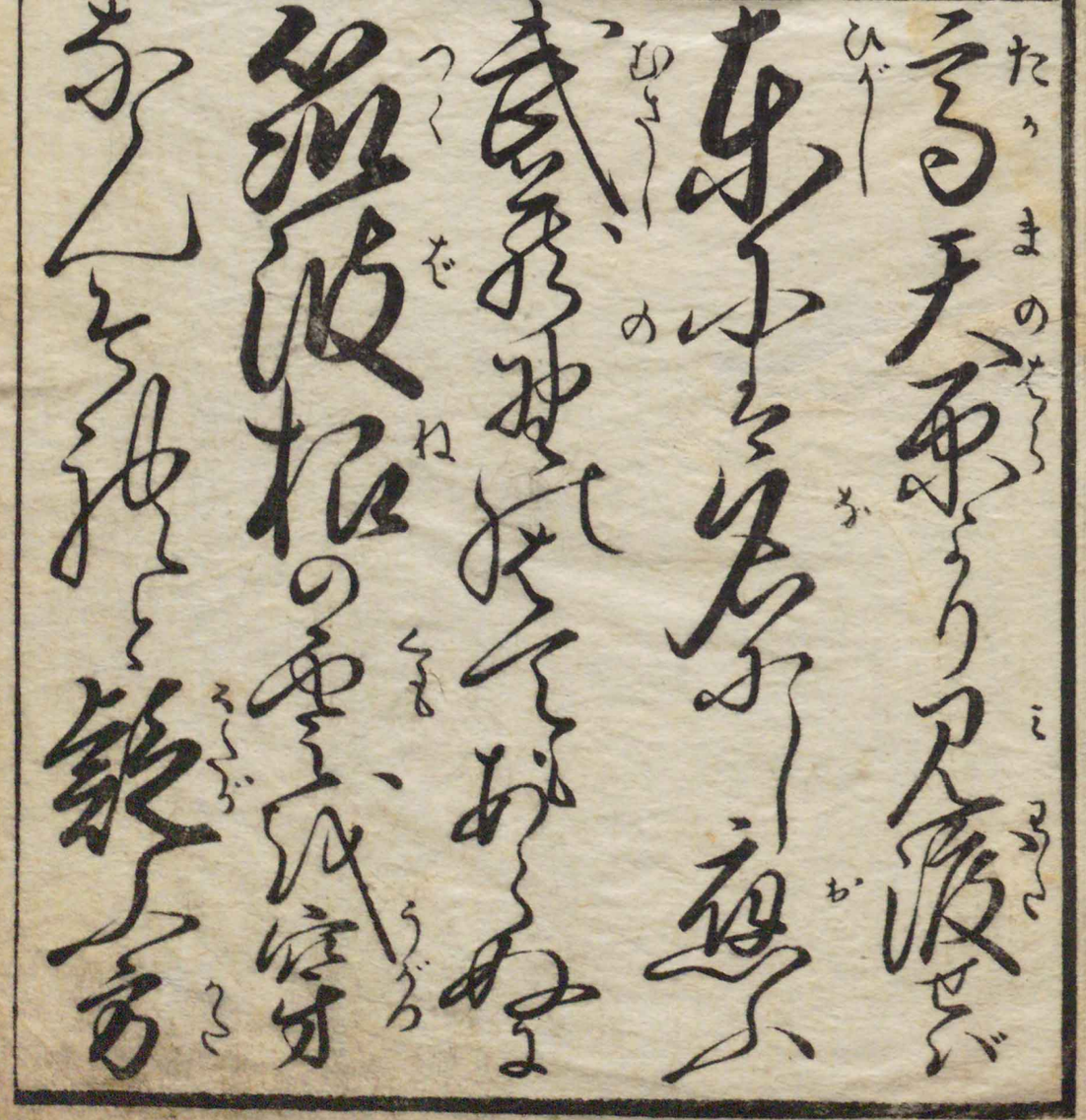
為ゑの石窟あり
又は前小山の岳
薬師の岳三ヶ宝
塔あり東面する
多訳自ヶ多八毘
首羅摩の作と云
佛堂の森を
向ふを八ヶ岩
ヶ山道あり
古人の俳諧



世代りの神も
ありてやつら岩
○東地蔵のこと春
驚水あり 稀代の
霊水なり
○五供所へ烏の
宮毎の神供を献
ぜれば二羽の烏来
て見伐宮ふ
○建久年中



太政官法藤宣
ふ榛名山奉
地と云霊場と云
寄次法復国家
恒紀徳良の霊
地と云ふ
をりて南山
の山宗めるむ
を知らず



かくへ見へ有
流れ川さの紅葉色深淵
山〻て一層物中に重
なりて南舟羽翠海
嘯くは白雲山合

洞人重霧乃山〻秋のこと
舟漂增水栗乃実
雄沐の正乃紅葉きく
伝濃なる深谷に嶽小流め
幽、秋水同光り中一の神門

小入遊行の峰入松岳
間ゝ多く茶屋に美味
八脇島の故事を汎つ
一瀬坂二瀬平編蝙蝠
数ゝ山岳坂越ゝ

出羽町より合の洞門茶
ゝ酌ゝ集門ゝを
雇ゝ寺二の洞の鶏栖を
入右小巖殿寺湯殿院
東叡山寛輪の別当

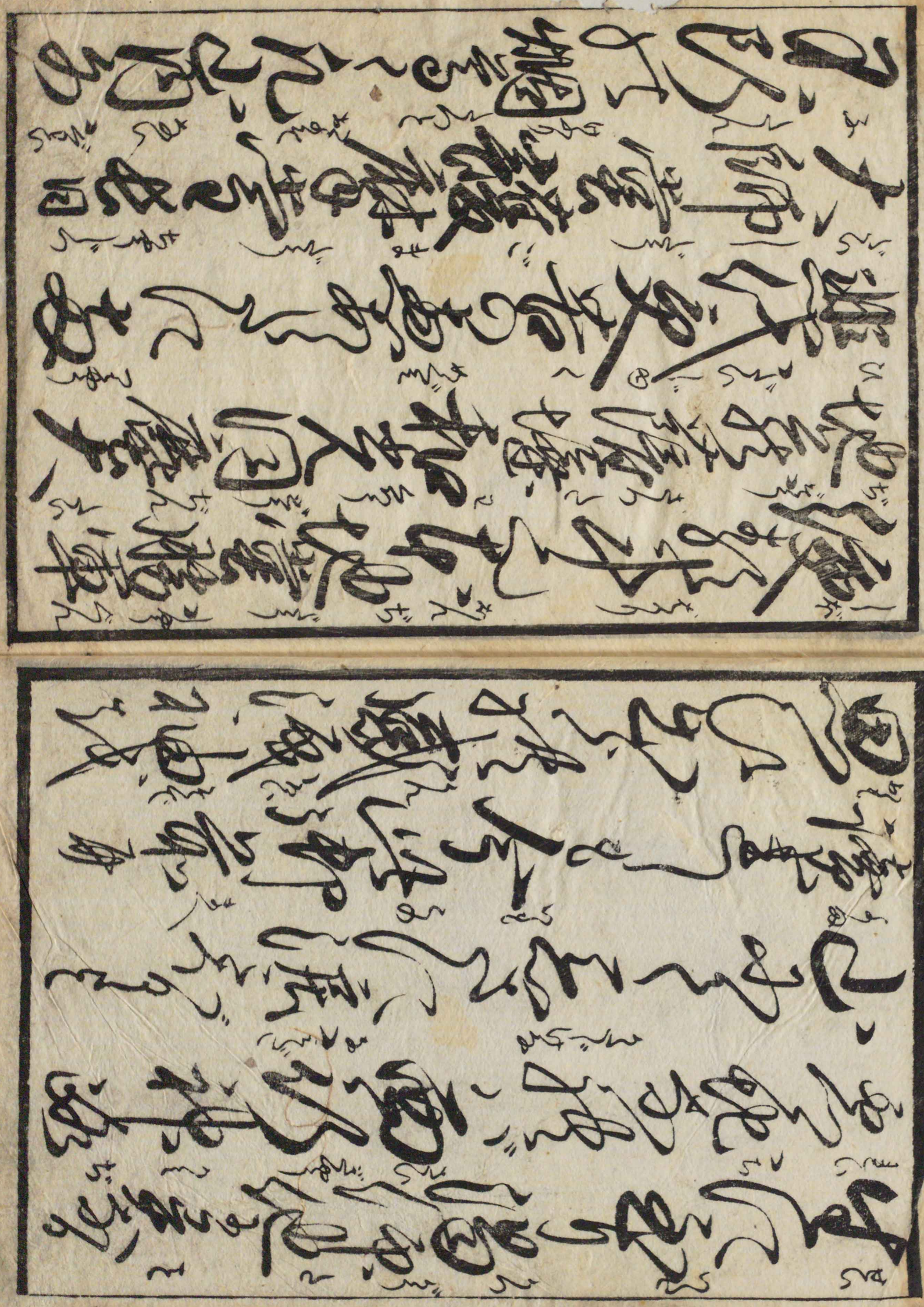
和なり神橋を渡り二王門
二力士を運ぶ人夫一万
義春岩の残り石文の
嶮岩峻谷を過ひ魂を
消す下に隙く千仞乃
渓澗水清く岩石
の間を潺湲人
巣を作る蜘蛛
花ゝ紅葉ゝ
石門を過ぎ懸崖橋

源まづ迎ふ石の沓
年泉歴庫楓の奇美
と感神ちまつる宝蔵
孤立せる峰岩清石
とゝかゝて洞窟あり滝流を

知らぬ岩社岩洞と滝
宮柱太敷ふとしき知
て榊ばの神社出花る
金蹟と穿て八重乃
大神まします殿ハ

古の先祖國常立神豐雲
國常立神伊弉諾伊
弉冊尊神大己貴神和
奈岐陰速男神宗像
神彦湯文神一ツ宮

居小松人ばゝ長道
軍陣陰陽醫家農
民商賈等の祖の神
舟まもる人小人上古の事
上壹人今ハ十億兆の者



竹橋社東社九十九社と
名を表詠侍りける
の江志十八町川は清
くくりしを舟を生ゝ毎
沙番和を毎り低澤乃

男根石を洗て神
峠小山を秋ば眺下に湖水
秀花ゝ遠眺波浪小
眺て舞さ天色に嶋恋
嶋嶋ゝ晩風を鯛を

柳の枝に白鷺
頃乃多面の眼の目に陰晴
明滅を変ずる丹
青乃彩色を
小魚の水中に躍る群鹿

野小遊る沼を畏
ざるふ鞍せの家を
知る家屋士の嶽小波河
る高根の雪の面影を眺
安穏のふるまる鳥羽玉

霊山の下露をはらひ岩垣
沼の水こほりに気やうるを
よそ見えもり古寺の月鳥
の花名物菖蒲杜若のさかり
水河原茂るやはつきそひ

据ゑごとく生ひつゝ真菰刈男の
平滑影あらしおりし茂もを
こそ思ひ知りぬれ叢中一行の
古碑龍花院殿とあれは
当座本朝来の宮池の

寝おろしやひも傾きて
社家町廊ヶ宿を求め草
鞋とき打つどひ此所に
棟々仏法讃嘆の声
妙事登我善夜ぞ哉

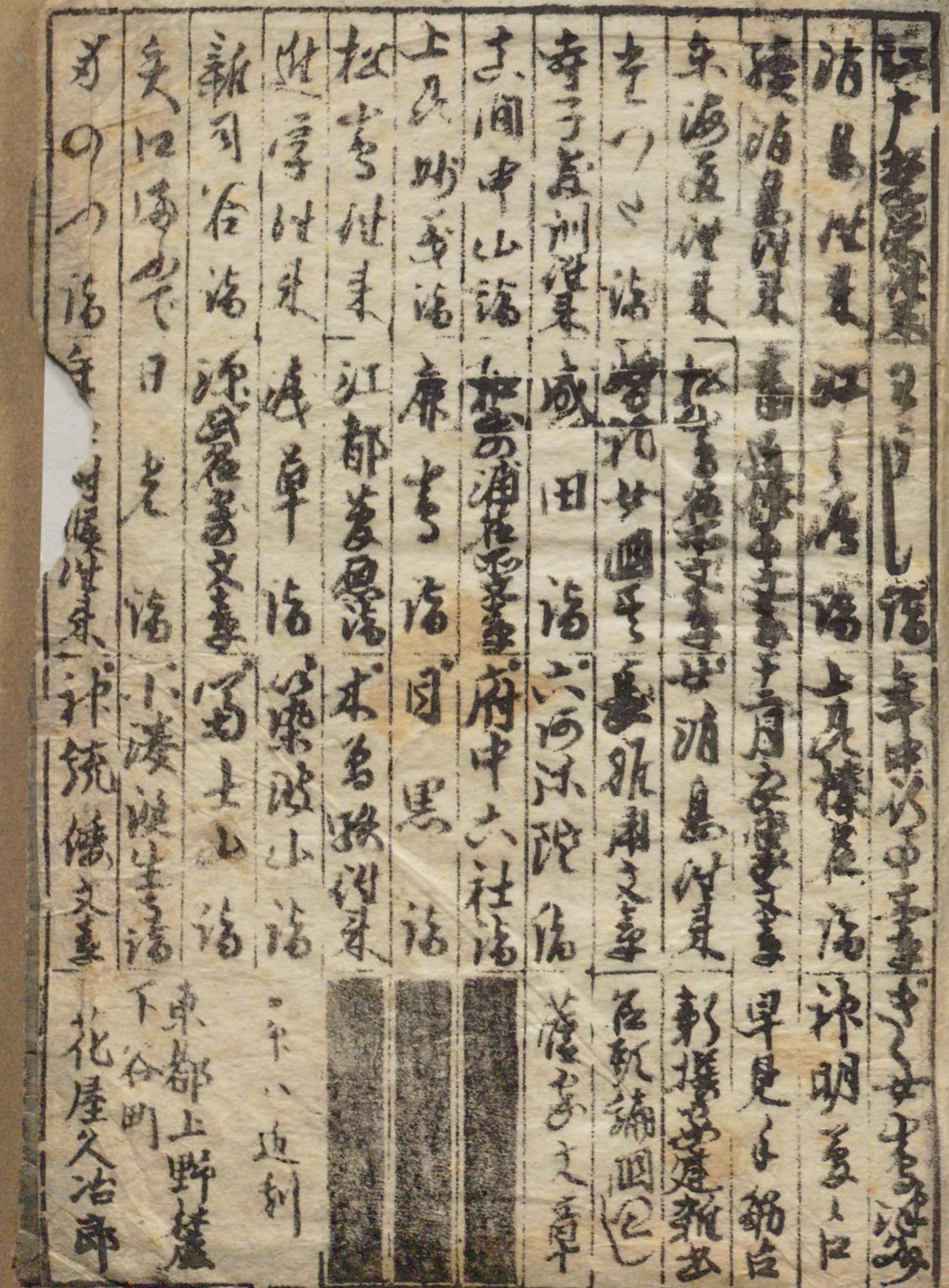
伽藍ぞとうる神多燈の下
舟路の揚衙閣
川と雅膝に枕をして鹿
の声にしみ深き果なき夜を
驚され篝燭の再び見への

水澤の月をながめて
ゆくすえまでも
眺ぬ
帰りぬ

如三井蘭山子園

享和三癸亥
首夏日

今中宝田



22073

御　注　意

○ 本は大切に扱いましょう。

○ 本は転貸借はお断りします。

○ 10日間の期限に必ず返して下さい。

○ 本を汚損または紛失した時は同一の本
又は相当代価を弁償していたゞきます。

群馬県立図書館
前橋市栄町10番地
（電話3008番）

中庸後會記

芳洲

芳洲 協平